



日経ビジネスに見る「経済先読み・解説」 107号

経営コンサルタント 栗田 剛志 11.9.12

発行元：m9コンサルティング

<http://www.m9consulting.biz>

このメールマガジンは、今週発売となる日経ビジネスの中から気になった記事を選び、私なりの視点で考えたことについてお伝えするものです。会社での朝礼時のネタ、取引先との会話、同僚との間の話題づくりにお役に立てたらと思い、毎週月曜日に発信いたします。

「日経ビジネス2011年9月12日号 no.1607  
『未来都市フクシマ～被災地は世界を変えるか』」より

### 【転んでもただでは起きるな】

東日本大震災から半年が過ぎました。被災地は、放射能汚染と風評被害に今もお喘いでいます。

先日、心痛い事件が起きました。サッカーのベルギーリーグで活躍する日本代表のゴールキーパー川島選手が出場する試合で、相手のチームのサポーターから「フクシマ、フクシマ」と、心ない野次が飛びました。

問題を起こしたサポーターがいるクラブは謝罪を表明しましたが、その試合の後、川島選手は涙が止まらなかったそうです。

この震災で「フクシマ」の名は世界に轟きました。その「フクシマ」は、絶望に沈んでいるだけではありません。少しずつですが、「フクシマだからできること」に動き始めています。

「原発事故は既に起きてしまったんだから、そこから何をやるのか、という発想が必要だ。どうやったら人を呼び込めるかを考えないと」

今、窮地にある福島経済には、逆転の発想が求められています。このコメントは、郡山市に本社を構える中華料理チェーン「幸楽苑」の新井田社長のものでした。

この社長さんは、本気で「原発観光」を考えています。放射能汚染を取り除き、世界最先端の除染技術を実証する。汚染された瓦礫を原発の沿岸に集めて巨大な堤防にすれば、観光名所になるうえに、処分問題も解決できる。

いかがでしょうか。実現可能性はともかく、世界に知れた「フクシマ」を利用しようという試みがなされようとしています。

除染、廃炉、汚染瓦礫処理、原子力研究、放射線治療…。「フクシマ」だからこそ集められるヒトとカネがあります。

大学のエライ先生もこう言っています。

「除染は確立した技術がないうえ、これから何年も続いていく。雇用の場にしない手はない」

除染ビジネスの規模は少なくとも1兆円を超えられています。

震災で「戦う市長」として有名になった南相馬市の桜井市長は、「放射能汚染という負の遺産を取り除く産業を作る」と断言しています。

福島県では、放射能が理由で人口が流出しています。福島原発の廃炉決定によって、関連産業だけで

も1万人の雇用が失われます。関連企業は120社にも及び、地元の流通業や飲食業へ大きかった貢献も無くなってしまいます。

だからこそ、新産業、新事業を生み出す大胆な発想と行動が求められるのです。

日本人はリスクを負うことに対して意識が低いとよく言われます。今回の震災で、改めてその傾向が浮き彫りになりました。

原発に対して誰もがリスクなど意識していませんでした。国が「絶対安全です」って言っていたのですから仕方ありません。ただ、この傾向は他にも垣間見ることができます。日本人は「リスクゼロ」を求める傾向にあるのです。

降りかかるリスクを自分で評価し、リターンとの兼ね合いで判断するのではなく、リスクそのものを排除しようします。

例えば、1990年代後半に起こった「ダイオキシン騒動」。「埼玉県産のほうれん草にダイオキシンが含まれている」という報道がなされると、焼却炉が発生源と疑われました。「焼却炉を止めろ」という世論が沸き起こり、学校などの小型の焼却炉が廃止されました。しかし、結局のところ健康被害の主因は、農薬中のダイオキシンが魚に蓄積し、それを食べることだったわけです。

金融商品にも同様の現象が起っています。投資商品にはリスクが伴いますが、元本割れになると、証券会社に保証を求める声は後を絶ちません。

もっと身近な例で言えば、かぶと虫が獲れるクヌギの木周辺で子供が蜂に刺されると、「その木が危険だ」ということで切り倒されてしまいます。すると、子供たちはカブト虫を獲ることができなくなってしまいます。

一般的な日本人は、リターンだけを求め、リスクを負っているという意識が薄いのです。カブト虫を獲りに行くことは、蜂に刺されるリスクを覚悟しなければならないのです。

福島県にあるスーパー「いちい」は、福島県内にある契約農家から仕入れた青果の放射線測定結果を公開しています。農家が商品を出荷するのと同時に測定用サンプルを受けとり、店頭と並べるまでに、本社に導入した測定器で放射能を測ります。国が定める食品暫定基準値を上回れば、店頭に出さずに県に報告します。測定結果は、店頭だけでなくホームページでも公開しています。

「いちい」が放射線の自社測定に踏み切った理由は、測定値を公開する以外に消費者の不安を取り除く術がないと考えたからです。

「いちい」の社長さんは、「放射線測定結果は出し続ける。購入するかどうか、消費者に判断してほしい」と言っています。

「フクシマ」は、私たち日本人の意識や考え方を変えることを迫っています。自らリスクを検証して自己基準を作り、判断していくことを求められているのです。

世界を震撼させた原発事故によって、「フクシマ」はこれからも長く厳しい状況が続きます。しかし、それは旧体制の崩壊と新時代の幕開けにもつながっていきます。

これまでになかった発想のもとで新しい事業が生まれ、私たちひとり一人の意識も変わっていきます。

震災による負の遺産は、被災地だけのものではありません。私たちの手でプラスに変えられることがあるはずです。迫りくる放射能被害でリスク感覚を磨くこともできます。

「転んでもただでは起きるな」

私たちは、必ずできます。